ドルノド編

モンゴル通信

2013年9月21日

NO.3

新年度おめでとう！

９月１日、モンゴルで新年度が始まりました。日本の学校は4月始まりですが、こちらは９月。新年度は９月１日からと決まっているので、日曜日にも関わらず学校がありました。校庭に華やかに装飾されたステージが出現し、盛大なBGMと共にスタート。「新年度おめでとう！」という挨拶を交わし、小学生が社交ダンスを踊り、 中学生がロックな音源でモンゴル国歌を独唱、 高校生がアイドルかのごとく歌って踊る。 敬和での始業礼拝や小中学校時代の始業式をイメージしていたので、本当に驚きました。子どもと先生、保護者がひしめき合い、誰がいて誰がいないのか分からない。私も言われるがままに、「何だこれ？」と自分で自分に突っ込みをいれながら、着物を着てバイオリンでモンゴルの民謡を弾きました。“日本人はいつも着物で、小股で歩く” と、子どもたちに印象付けてしまいました。

校長先生と同期の小学校教諭隊員と。

モンゴルの学校

私の活動先は、ドルノド県ヘルレン村にあるハーン・オール統合学校。１１年制の学校で、１年生、２～５年生、６～１１年生と校舎が３つに分かれています。全校で約１５００人もいる大きな学校です。しかし、生徒数に対して教室数が少なく、また小さいため、全校生徒が午前は高学年、午後は低学年の生徒が登校し勉強する二部制になっています。

午前も午後も、４０分授業が７時間。８時から１９時まで授業が詰まっています。ホームルームや、行事、全校で集まって話しを聴いたりする時間はありません。授業を組むのが精一杯で、その他のことを行う時間や場所をとることができないのが現状のようです。

音楽の授業の驚き…

モンゴルのカリキュラムでは、音楽の授業は日本の中学３年生にあたる、９年生まで。学校に音楽の先生は三人いて、二人が１～５年生、もう一人が６～９年生を担当しています。私は、６～９年生を担当している“アリオンバートル”という先生と組ませてもらうことになりました。馬頭琴やホーミー等の民族楽器の専門家です。それだけでなく、コンピューターを操りド派手な音楽を制作。歌もマイクパフォーマンスも上手い、エンターティナー。始業前、アリオンバートルとこんなやりとりをしました。

ア：リコーダーとバイオリンとピアノと合唱のクラブをやってくれ。

私：いいけど…リコーダーと合唱は授業でもやるよね？

ア：授業は、音楽の歴史を書いて勉強している。実技は好きな子がクラブ活動でやるからいいんだ。

私：？？クラブだけじゃなくて、授業でもやりたい。

ア：好きじゃない子は寝ちゃうだろ。だから、好きな子はクラブでやればいい。これで皆が幸せ！

私：授業で勉強しているものと合わせて歌を歌ったり、聴いたりすることもできると思う。

ア：日本みたいに音楽室もないし、楽器もないんだ。ここではできないんだよ！

私は、なぜ音楽の授業で実技をやらないのか不思議で仕方ありませんでした。しかし、その後、音楽の教科書を手にしたとき、その謎が解けたのです。モンゴルの音楽の教科書、文字だらけ！私がかつて音大で勉強したような音楽史がびっしり詰まっていて、単元ごとに練習問題が付いています。年に４回筆記試験があるんですって！楽譜は？と言うと、それぞれの作曲家の代表作の一フレーズが載っているだけ。歌える曲は片手で数えられるほど。

９年生の新年度一回目の授業。まだ教科書が届いていないため、生徒は先生が読み上げる文章を必死にノートに書き取っていました。“印象派：ラヴェル、ドビュッシー／表現派：ベルク、ウェーベルン、シェーンベルク…”。それが終わると、指名された生徒が前に出て好きな歌を歌って授業終了。

私：この教科書、難しい。大変だね。

ア：そうなんだ。日本ではどんな授業をしているの？

と、日本の音楽教育を紹介しながら話しを詰めた結果、６７年生は、授業で実技を取り入れていくことになりました。８、９年生は、変わらず座学中心。歴史書のような教科書。どうしたら少しでも実技を取り入れられるか、面白い授業を展開できるか、辞書を片手に訳すところから始めなければならないのでした。（冨井愛）

８年生の教室で